

みんながつながるウォータータウン
～帰帆島及び中間水路を地域の資源とした新たな水辺の暮らし～

令和4年10月

老上西学区まちづくり協議会

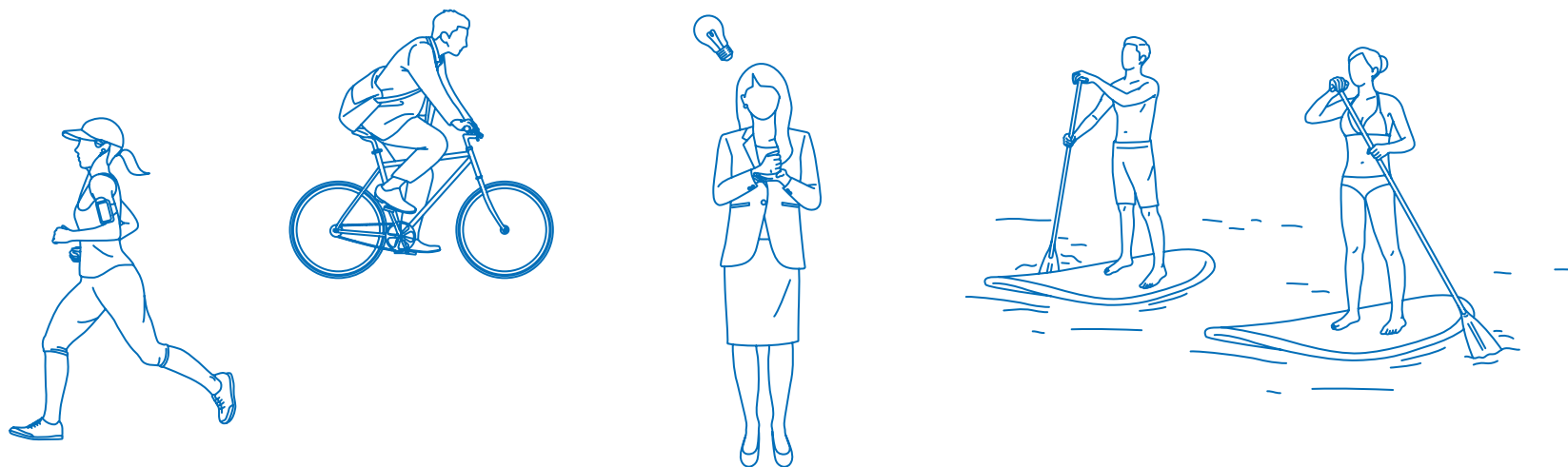
協力 立命館大学阿部俊彦研究室・金度源研究室

はじめに

1982年に帰帆島が整備されてから40年が経ち、時代の変化により、施設の老朽化や中間水路の水質などが、地域の問題としてあがっています。これらの問題を解決するために、老上西学区まちづくり協議会では、中間水路を介してつながる老上西学区と矢橋帰帆島の未来のあり方を考えるためのワークショップを開催しました。

ワークショップでは、老上西学区の地域住民の皆さんをはじめ、草津市職員、矢橋町自治会、湖南中部浄化センター関係者、および民間企業の方々に参加していただきました。現状の帰帆島周辺の良い点、悪い点を話し合い、具体的な将来のアイデアを出し合いました。

本冊子は、ワークショップでの参加者のみなさんのご意見を踏まえて、立命館大学阿部俊彦研究室の協力のもと、老上西学区まちづくり協議会として、望ましい2050年の未来像をまとめたものです。



かつて矢橋は**東海道を結ぶ湖上交通網の要**でした。矢橋港は急がば回れということわざが生まれた場所と言われており、連歌師の宗長が詠んだ「もののふの矢橋の船は早くとも 急がば回れ瀬田の長橋」という歌がもとになっているそうです。

「もののふの矢橋の船は早くとも 急がば回れ瀬田の長橋」

江戸から中山道、東海道を辿り京都へ向かう際、草津宿から大津宿の間は**矢橋の渡し**、**瀬田の唐橋**の2つのルートが存在していた。琵琶湖を矢橋の船で渡ると早いですが、比叡山から吹き付ける風（比叡おろし）に煽られて転覆する可能性があって危険なので、急ぐなら回り道だけど瀬田の長橋を歩いて渡った方が安全という意味。



現在も目印であったイチョウや灯台、船着き場は残っていますが、近江八景に描かれているような帆掛け舟の行き交う景色は見られなくなりました。



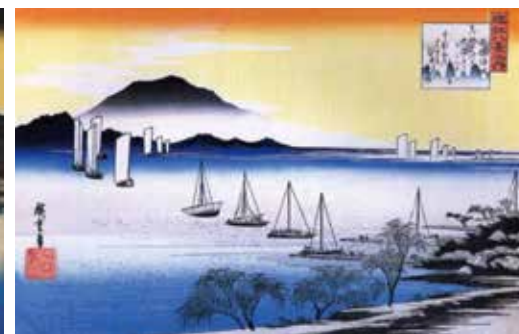
▲イチョウ

▲常夜灯

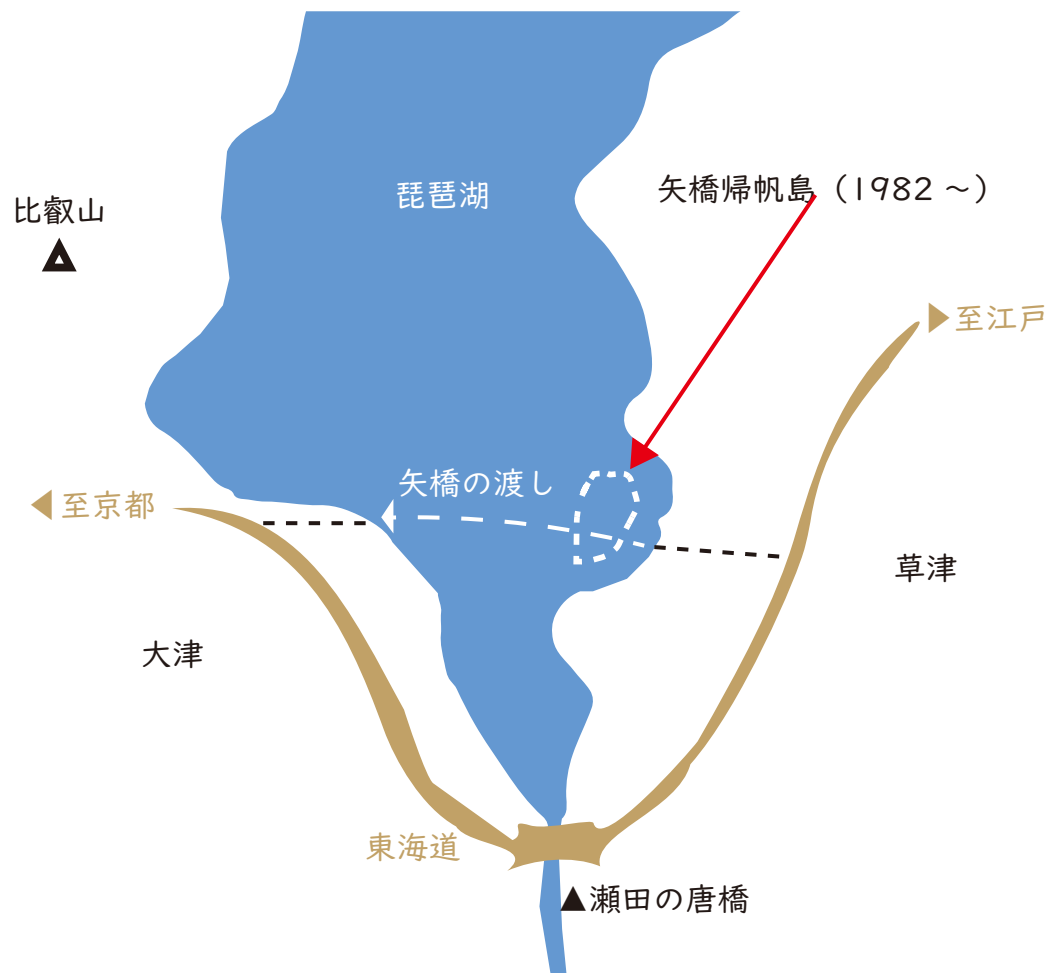
▲船着き場跡



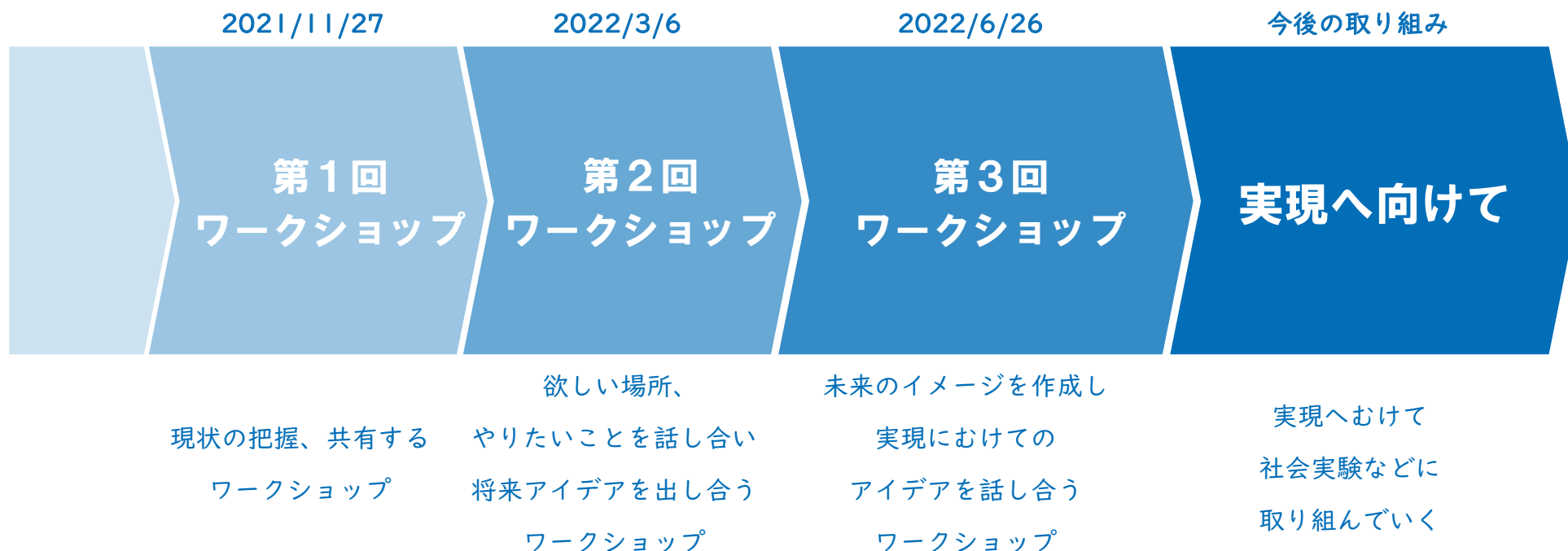
▲近江八景 瀬田の唐橋



▲近江八景 矢橋の帰帆



ワークショップを開催し、 地域住民のみなさんと話し合いました！





➔ P25

第1回ワークショップ (2021年11月27日)



良い点、悪い点、将来のアイデアを旗に記入して意見を出し合いました。

スローガンと5つのコンセプト

➔ P07

エリアスローガン

みんながつながるウォータータウン

～ 帰帆島及び中間水路を地域の資源とした新たな水辺の暮らし ～

5つのコンセプト



水と親しむ風景のある暮らし



歴史を学び地域を知る島



みんなに愛されるインクルーシブな水辺



まちが育む健康習慣

welcome!

滋賀一魅力のあるレジャースポット

第1回ワークショップの意見を踏まえて、帰帆島エリアのこれからのまちづくりの方向性をスローガンと5つのコンセプトにまとめました。